週末には娘の悦子さんたちが
食べものを持って、
ナミさんの家に会いに来てくれる。

かなしくもあたたかい、
いのちのつむぎ

國森康弘　写真家、ジャーナリスト

ナミばあちゃんが自宅に戻ってきてから5日後、筆者は、京都から様子を見に来ていた息子の直之さんから、何時間も家族の思い出話を聞かせてもらっていた。認知症が深まっていくナミさんが、帰省した直之さんの顔を見ればいつも味噌汁を作ろうとしてくれたこと。しかしそこには材料がなく結局作れなくなること。畑を荒らすサルと柵の中で大立ち回りをしたこと、この集落で生まれ育ち、夫を介護し看取ったこと……。

そんな話をしている最中に、ふと直之さんが立ち上がった。そのまます～っと、隣の隣の部屋である、母の寝室に吸い込まれていく。後を追って見ると、ちょうどナミばあちゃんの呼吸が止まるところだった。

娘の悦子さんが家の裏手から駆けつけて来た。母親の手を握って「おばあちゃん」と呼びかける。息が止まって、30～40秒は経っていた。が、ナミさんは悦子さんに答えるかのように、再び息をし始めた。

悦子さんは、もう一度両手で母の手を握り直して、言った。「おばあちゃん、ありがとう……、もう、ええよ…」。その言葉を聞いて安心したのか、ナミばあちゃんは完全に息を終えた。

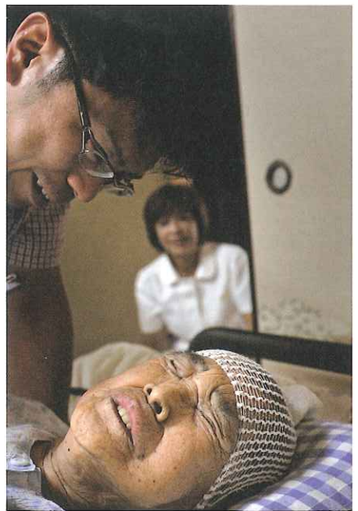
亡くなったその目からは、涙がこぼれていた。それに気づいた悦子さんは「あぁ、これでよかったんやね」と語りかけ、ぽろりぽろりと泣きながら笑った。

滋賀県東近江市の永源寺地域。その一番東端の山奥にある君ケ畑という集落で、ナミさんは89年の生涯を過ごした。夫を見送ってからは、ずっと一人暮らし。永源寺診療所の花戸貴司医師から訪問診療のつど、「食べられなくなったり、寝たきりになったりしたら、病院に行きたいですか」と聞かれると、そのたびに「いやいや、最後までわが家におりたい」と答えていた。医療や介護の専門職の人たちが連携しながら訪問してナミさんに寄り添ってくれるし、ご近所さんが毎日のように何時間も話し相手になってくれる。

そんな安心感もあった。

ただ、離れて暮らす家族には、〝世間体〟のほか、火事や〝孤独死〟などさまざまな不安もある。老衰や認知症の進行で、会話や動作がままならなくなっていく母のことが心配になって、ついに市内の都市部に暮らす悦子さん宅に引き取った。それから何週間かのち、ほとんど動けないはずのナミさんが夜中、トイレに行こうとして途中で転倒、頭を七針縫うけがをした。「トイレだけは、最後まで自分で行きたい」。

目をつぶりうなるような表情のまま、寝たき



ナミさんは、悦子さん宅でけがをして
もうろうとする中でも、
「君ケ畑」に帰りたいと言った。
「大丈夫ですよ、
みんなで一緒に帰りましょう」と
答える花戸医師。

りで過ごすナミばあちゃん。しかし、家族の会話の中の「君ケ畑」という言葉には反応した。「もしかして、君ケ畑に帰りたい？」と悦子さんが尋ねると、ナミさんは二度、うなずいた。

——自宅へ、戻る。畳のにおい、窓から入るそよ風、やわらかな光、親しい人たちの声が、そこにはあった。ナミばあちゃんの表情が穏やかになっていく。そして5日後に息を引き取った。

看取りの場には、別れの辛さ、悲しみがあった。しかし、ご家族ものちに振り返っているように、そこには同時に、何かあたたかいものが満ちていた。充足感、高揚感……。涙の中に笑顔があった。筆者の取材経験上、戦争や貧困による死の現場では感じられなかったものだ。生命力、エネルギー、命のほとばしり、のようなものを感じた。

命のバトン、と言えるのかもしれない。代々ご先祖さまから受け継ぎ、自身でも90年近く蓄えてきた「生きる力」と愛情と、言い換えられるかもしれない。

その圧倒的な空気感は、これまで立ち会わせてもらった数々の出産の現場に通ずる気もした。誕生と死——。これらこそが、命のバトンをつなぐ瞬間ではないか。だからこそ似ているのではないだろうか。

息子の直之さんが、ナミばあちゃんの左手の薬指につけられていた指輪に気づいた。「こ、これ、わしが作ったやつ」。直之さんが20歳になる前に手作りして、何気なく渡した指輪。40年間、母がつけ続けていたことを、この日初めて知った。

私たちは、ご先祖さまの誰一人が欠けても、今の世には誕生し得なかっただろう。同時に、自分が欠けてしまったら、その後に続く子々孫々の命までが誕生し得なくなるだろう。「いのち」は私たちが、人類としてまた生きとし生けるものとして、個としてまた総体として、つむぎ、次へつないでいくもの。そのことを、看取りの場を通じて先達たちに教わった気がしている。

*　*　*

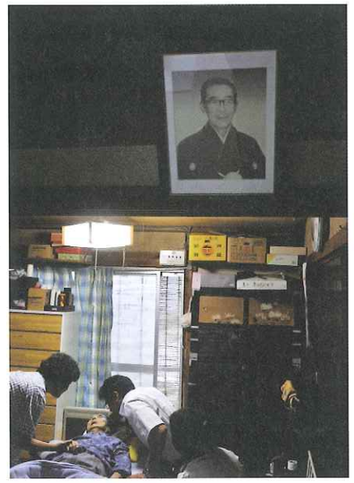
「いのち」のつながりを感じられるようなあたたかな見送りを、あえて子どもたちにも触れてもらえるように、写真集ではなく写真絵本という形でシリーズ化した。命の有限性と継承性を日々想うことは、全世代を通じて必要だと感じるからだ。

花戸医師が、ある小学校で「人の命はリセットできると思いますか」「人は死んだら生き返ると思いますか」と尋ねた。3割ほどの子が「リセットできる」「生き返る」と答えていた。

ナミばあちゃんとは別の写真絵本に登場する、小学5年の女の子の答えは違った。恋（れん）ちゃんという名の少女は、一緒に暮らしたひいおばあちゃんを看取った。「人は死んでしまうと、とっても冷たくなって2度と生き返りません。でもひいばあちゃんは私の中で、私の心の中で、生き続けています」

中学3年になった恋ちゃんに先日会って、当時の話を聞いた。曾祖母の竹子さんが亡くなる最期の日々、そして息を引き取ってからの数日も、ひいばあちゃんの死を怖いとは全然思わなかったそうだ。共に暮らす中で、苦しまずに穏やかに最期を過ごす様を目の前で見てきたからだ。呼吸が止まったとしても、その存在は「遺体」ではなく「大好きな竹子ばあちゃん」そのものだった。

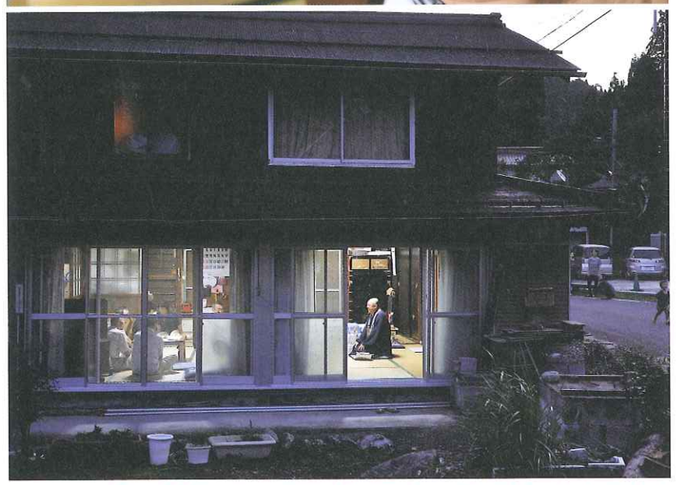
竹子さんが亡くなった当初は悲しみの方が大きかったが、今は感謝の気持ちの方が強いという。恋ちゃんは将来について、「職業はまだ決めてないけど、ひいばあちゃんのようになりたい。私の笑顔を通じて周りの人や子どもたちを笑顔にできる、人の役に立つ人になりたい」と語った。



「お父さん……私ももうすぐいきますからね」

亡くなる前の最期の数日、孫、ひ孫たちがやって来た。

上：恋ちゃんのひいばあちゃんの竹子さんが息を引き取った。顔にかけられた白い布を恋ちゃんは取り、ほほやおでこに触れた。　下：「私もおおばあちゃんみたいに、やさしいおばあちゃんになれるかなあ」。「いのち」は受け継がれていく。



上：亡くなった母の左手薬指から外された指輪を眺める直之さん。「こんなもん、ずっとつけとったんかいな」　下：住み慣れた場所で最期まで、ナミばあちゃんは凛と過ごした。

國森康弘
くにもり やすひろ

1974年生まれ。写真家、ジャーナリスト。京都大学大学院経済学研究科修士課程修了。神戸新聞記者を経てイラク戦争を機に独立。イラク、ソマリア、スーダンなどの紛争地、また東日本大震災の取材を重ねる。近年は看取り、在宅医療などの撮影にも力を入れている。2011年度上野彦馬賞、コニカミノルタ・フォトプレミオ2010などを受賞。著書に『いのちつぐ「みとりびと」』（全8巻、農山漁村文化協会。第1巻『恋ちゃんはじめての看取り』で第22回けんぶち絵本の里大賞）、『家族を看取る』（平凡社新書）、『証言 沖縄戦の日本兵』（岩波書店）などがある。

写真絵本シリーズ

『いのちつぐ「みとりびと」』全8巻
各巻32頁
価格：1,800円（税別）

第1巻	恋ちゃんはじめての看取り
第2巻	月になったナミばあちゃん
第3巻	白衣をぬいだドクター花戸
第4巻	いのちのバトンを受けとって
第5巻	歩未とばあやんのシャボン玉
第6巻	華蓮ちゃんさいごの家族旅行
第7巻	ぼくはクマムシになりたかった
第8巻	まちに飛び出したドクターたち